

〈論文〉

道徳教育における「人間の力を超えるもの」の扱い(下)
—「特別の教科 道徳」における位置づけ—

高 田 純

〈目次〉

はじめに

- I 学習指導要領における諸概念
- II 道徳教育の内容は「体系化」されたか (以上前号)
- III 生命と自然の尊さをめぐって
- IV すべての生命の尊厳
- V 崇高性と「人間の力を超えたもの」
- VI 崇高なもの、人間の力を超えたものにかんする教材 (以上今号)

III 生命と自然の尊さをめぐって

1 「生命、自然、崇高なもの」の「視点」の特異性

『要領』で示される4つの「視点」の中でも最も分かりにくいのは、「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」というDの「視点」である。すでに平成10、20年版でも、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」が第3の「視点」として示されていた。今回の改定で「生命」が付加されたが、「生命の尊さ」は平成20年版でも第1の「項目」(平成1、10年版では第2の「項目」)に含まれており、「生命」の概念が内容としては基本とされていた。また、これらの「視点」においては生命、自然、崇高なものほかに「人間の力を超えたもの」も基本とされている。「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」が、改定された『要領』では第3の「項目」に、平成20年版では第2の「項目」に(平成1、10年版では第1の「項目」に)含められている。ところが、今回の改訂では、『解説』によれば、「生命」、「崇高なもの」、「人間の力を超えたもの」は

従来よりもいっそう広い意味をもたされ、その意味がいっそう理解されにくくなっている。

第4の「視点」にかんする新しい『要領』および『解説』にたいする疑義はそれらの内容について評価をめぐるものであるまえに、まずそれらの内容そのものの理解をめぐるものであり、この点で他の「視点」にたいする疑義とは異なっている。『解説』においては、特定の思想的立場や価値観に基づくと受け取られるような見解が断片的、断定的に示されていることが少なくない。そのため、「意味不明」、「哲学的で難解」という声が教育現場で聞かれる。これがどのような「哲学的」意味をもつかについてはのちに検討したいが、『要領』が法令の一種として法的拘束力を与えられるのであれば、文言の意味が明瞭であることがまず基本条件として求められる。「道徳科」は、基本的に学級担任が担当するとされているのであるから、多数の教員が文言の基本的意味を理解できる（具体的な解釈や評価は別として）ものでなければならないであろう。また、道徳には専門家はおらず、道徳は多数の一般市民の共通の観念に依拠するのであるから、『要領』の基本内容は一般市民（保護者を含め）によって理解され、同意されうるものでなければならぬであろう。「生命、自然、崇高なもの」とのかかわりに関する「視点」にはこのような条件が欠落しているといわざるをえない。今回改定の『解説』では論点が以前の版よりもいっそう拡散し、論理性がより弱くなってきている。

2 自然に対する道徳的関係をめぐって

『要領』において、「自然、崇高なものとの関わり」が「視点」として独立するのは平成1年版からである。昭和44年版では、「美しいものや崇高なものにすなおにこたえる豊かな心を養う」という項目が13の項目の1つに掲げられ、昭和52年版では、「自然を愛し、美しいものに感動し、崇高なものに素直にこたえる豊かな心をもつ」が16項目の1つに掲げられていた。なお、「人間の力を超えたもの」という用語はすでに昭和44年版に登場した¹⁾。

ところで、生命、自然との関わりを道徳の対象とすることをめぐっては、環境倫理学において論争がある。しかし、『要領』と『解説』ではその考慮の跡が見られない。

従来の倫理学においては伝統的に、人間関係、社会関係、また自己関係は道徳的性格をもつが、人間の自然に対する関係は道徳的性格をもたず、自然は人間関係、社会関係において付随的、背景的な位置にあるすぎないと見なされてきた。しかし、1970年代に環境倫理学が登場してからは、人間生活にとっての自然の意味が重視され、人間の自然に対する関係が道徳的性格をもつことが注目されるようになった。ただし、この関係の理解につ

いて人間中心主義と自然中心主義のあいだで論争がある。

人間中心主義においては、自然の保護は人間のために必要であり、それは人間の人間（個人自身、他人や社会）に対する義務や責任であると見なされ、人間の自然に対する義務や感謝は擬人的なものにすぎないと主張される。その理由は、義務や感謝は、意識や意志をもって人間に働きかける存在者に対してのみ成立するが、人間以外の自然的存在者はこのような働きかけをしないという点に求められる。このようにけっきょく、人間の自然に対する関係は人間関係あるいは社会関係、また自己関係においてはじめて道徳的性格をもつにすぎないと見なされる。したがって、人間の自然に対する関係が独立で道徳的關係として成立するとは考えられていない。これに対して、自然中心主義においては、自然保護は人間にとってよりも自然自身にとって必要なものであり、それは自然に対する人間の義務、責任であると主張される。自然保護が人間にとって必要になるのは結果的に、派生的にすぎないと見なされる。

しかし、『要領』は平成1年以来、自然に対する人間の関わりを道徳的關係の支柱の1つとし、すべての生命の尊厳、自然への感謝、生命と自然への畏敬の念を主張してきた。環境倫理学の文脈ではこのような立場は生命中心主義、自然中心主義に属すが、『要領』と『解説』は明確な根拠を示さないまま、それを自明のものであるかのように見なしている。

3 『要領』における自然中心主義

自然に対する人間の道徳的關係についての『要領』の見解の特徴を明らかにするために、環境倫理学における論争にやや立ち入ることにしたい。

人間中心主義にもさまざまな流れがあるが、最も狭い意味でのものは、自然は人間の生活の手段であり、人間は自然を任意に使用し、支配できると見なす。このような立場は自然破壊を引き起こしたと厳しく批判された。これに対して、より広く緩やかな人間中心主義は人間の生活の持続のために長期的観点から自然を賢明な仕方を利用してしようというものである。しかし、自然を経済的資源と見なしたうえで、その賢明な利用を主張することはなお狭さをもっている。そこで、より広く、自然の物質的、経済的価値のほかに精神的、文化的価値（美的、宗教的、レクリエーション的、教育的価値などを含む）を認めて、自然がこれらの価値をもつ点で、人間の生活の持続可能な発展のために自然保護が必要であるという主張が登場した。今日主流の立場はこのようなものであるといえる。

しかし、自然の諸価値が人間にとってのものであるかぎりには、自然保護は人間による自然の価値評価に依存することになり、自然保護がおろそかにされる危険性が残る。徹底し

た自然保護を主張する論者は、人間による価値評価に依存しない自然の「固有の価値」や「内在的価値」を認め、このような価値をもつ自然を無条件に保全すべきであると見なす。自然の「内在的価値」の典型は自然の尊厳である。急進的な自然中心主義者は全体論の立場から個々の自然物（生命個体等）よりも全体（生物種や生態系）に尊厳を見出す。しかし、自然がなぜ、どのような意味で「内在的価値」をもつのかはあいまいであり、ここに、人間中心主義からの反論を呼ぶ余地が残っている²⁾。

『要領』と『解説』は「内在的価値」という専門語を使用していないが、「すべての生命」、「自然の生命」の尊厳について語っており、顕著な自然中心主義的立場に立つ。筆者も人間中心主義に対しては批判的であり、生命や自然に対する尊敬を重視している。しかし、これに対しては人間中心主義からの有力な批判があり、現代日本においてもこの批判は、無視できない影響をもっているため、これに対して、明確な論拠をもって反論する必要がある、と筆者は考える。この点では、『要領』と『解説』の見解は独断にとどまっている³⁾。

注

- 1) 昭和44年度の『要領』の第8の項目の(2)には、「自然を愛し、美しいものにあこがれ、人間の力を超えたものを感じとることのできる心情を養うこと」が含まれていた。
- 2) 人間中心主義と自然中心主義との論争については拙著『環境思想を考える』、第2章(青木書店、2003年)を参照。
- 3) 筆者は、人間の生活は自然における相互依存の体系に依存しており、その存続なしには、人間の生活の持続可能な発展は不可能であるという理由で、人間生活にとって自然の保全が不可欠であると見なしている。この見解は一方で、人間にとっての自然の個々の価値(物質的、精神的価値)、あるいはその評価には依拠しない点で、拡張された人間中心主義とは異なるが、他方で、人間生活との関係とは無関係に自然の内在的価値を主張する自然中心主義とも異なる。前掲書、第4章、参照。

IV すべての生命の尊厳

1 改定『要領』における項目の変更

新しい『要領』においては、「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」という「視点」のなかの第1項目として、「生命の尊さについてその連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること」([生命の尊さ])、第2項目として、「生命の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること」([自然愛護])、第3項目として、「美しいものや気高いものに感動する心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること」([感動、畏敬の念])、第4

項目として、「人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることに喜びを見いだすこと」〔より良く生きる喜び〕が掲げられている。

平成20年版の『要領』では、「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」の「視点」のなかに、「(1) 生命の尊さを理解し、かけがいのない自他の生命を尊重する」、「(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」、「(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることに喜びを見いだすよう努める」という3項目が含まれていた。(平成10年版では(1)と(2)が逆の順序であり、平成1年版では、「自然を愛護し」が「自然を愛し」になっていた。)新しい『要領』では、平成20年版の(2)が、(2)と(3)に分割されたといえる。「崇高なもの」への直接的な言及は平成1,10,20年版にはなかったが、平成26年版ではそれは(2)に盛り込まれ、「人間の力を超えたもの」は(3)で独立に扱われるようになったといえる。¹⁾

2 人間の生命の尊厳について

以下では新しい『要領』のそれぞれの項目について考察したい。まず、「生命の尊さについてその連続性や有限性なども含めて理解し、かけがいのない生命を尊重すること」という第1の「項目」〔生命の尊さ〕の項目について検討しよう。

昭和33年版、昭和44年版、昭和52年版の『要領』では、生命の尊重は直接的には人間(自己と他人)の生命にかんするものであった²⁾。しかし、平成1年版では、3の「視点」の第2項目として、「生命の尊さを理解し、かけがいのない自他の生命を尊重するようにすること」が挙げられ、『指導書』では、「人間の生命のみならず、生きるとして生けるものの生命の尊さに気づかせ」と説明されていた。平成10年版、20年版の『解説』では、「ここでは主として人間の生命について考えるが、人間以外のすべての生命の尊さについても価値を置きながら考えなければならない」といわれていた。

そこで、本稿でもまず人間(個人と他の個人)の生命について考えることにする。平成年版以来の『解説』類では、人間の生命が尊厳をもつことが自明の前提とされている。しかし、国際的には人間の生命の尊厳について有力な異論が出されてきた。たとえばキリスト教においては、人間の(精神)の救済が基本目的であり、人間は神の似姿として尊厳を与えられているが、重要なのは魂であり、生命はそれ自体で尊厳をもたないと思なされている³⁾。カントは人格の尊厳(正確には、人格における人間性の尊厳)を強調したが、生

命が人格の基礎をなすことを認めながらも、それ自体で尊厳をもつとは見なしてはいない。一般に欧米においては、人間の生命に尊厳を認める見解は少数である。これに対して、仏教においては生命の尊厳が主張されているとしばしばいわれる。たしかに、仏は人間とすべての動物の生命を与え、これをいつくしむといわれるが、古典的仏典において生命の尊厳までも認められているかどうかについては議論の余地があるであろう。

生命倫理学においては、人間の生命の道徳的位置について人間のあいだに相違を認めるつぎのような見解がかなりの影響をもっている。すなわち、人間は人格として尊厳をもつのであり、人格を備えない（まだもたない、あるいは失った）人間個体（幼児、重度の精神障害者、植物人間など）の生命をばあいによっては奪うことが社会的に許容されるというものである⁴⁾。このような見解はアングロサクソン圏でかなり有力なものであるが、日本では少数意見である。しかし、日本では仏教の影響が強いことを背景に人間の生命の尊厳を自明なものとすることは適切ではない。

3 すべての生物の生命の尊厳について

さらに議論を呼ぶのは、『要領』におけるすべての生物の生命の尊厳という見方である。欧米では、すべての生命の尊厳という観念は仏教やジャイナ教の影響によるものか、シュヴァイツァーの「生命への畏敬」の思想の影響によるものと見なされがちである。平成1, 10, 20年版の『解説』類では、「人間の生命のみならず」、「生きとし生けるものの生命の尊厳」について語られている。今回改定の『解説』では、人間以外の生物の生命の尊厳という表現は直接に使用されていないが、「生きとし生けるものの生命の尊さ」に言及されている。『解説』が好んで多用する「生きとし生けるもの」という表現は仏教における「衆生」の言い換えである。このような意味あいを含む表現を公教育で使用する場合には慎重であるべきであろう。また、このような古風な表現は日本の日常語として普及しているともいえない。

さらにいえば、すべての生命（植物は生命をもたないと考えられていた）の尊厳が厳密に仏教の本来の思想であるのかどうか、日本的に変容された思想ではないかと問題も生じるであろう⁵⁾。しかし、たとえこのような思想が日本の伝統であったとしても、それが現代の多数の日本人に受け入れられているとは必ずしもいえない。それはせいぜい、考慮に値いする重要な見方にとどまるであろう。

環境倫理学において自然中心主義者は、自然的存在者の平等の尊重の根拠として「内在的、価値」に注目するが、その典型を生命の尊厳に見出す。『要領』、『解説』もこのよう

な傾向をもつ。ここでは人間中心主義が批判される。しかし、すべての生命の尊厳という思想を徹底させるならば、つぎのような困難な問題を引き起こす。

尊厳は、他の価値と比較考量することが不可能な絶対的な価値であるから、人間の生命のために他の生命を犠牲にすることは無条件で禁止される。例えば、肉食が禁止されるだけでなく、菜食も制限されるであろう。死んだ動物や、成長を終えた植物を食べることは禁止されないであろうが、植物の種子を加工して食べることは遺伝を阻害するので、禁止されるであろう⁶⁾。また、一部の急進的な自然中心主義者は、自然全体が個体さらには種に優先するという理由で、自然全体のために相当数の人間が犠牲になってもやむをえないと見なす（自然全体主義）。このような根本問題を中学校の段階で適切に扱うことができるであろうか。生徒からさまざまな意見が出されるばあいに、教師がそれを整理し、生徒が「多面的に、深く」考察するよう援助することがどこまで可能であろうか。

4 生命の連続性と関係性

改定された『要領』では、「生命の尊さについて、その連続性や有限性などをも含めて理解し、」といわれ、「生命の連続性」や「有限性」という用語が含まれたが、『解説』ではさらに「生命の偶然性」にも言及されており、このことが新しい特徴の1つとなっている。

なお、平成20年版の『解説』で、「例えば」として、「自分が今ここにいることの不思議」、「生命にいつか終わりがあること」、「生命はずっとつながっていること」に言及されている。また、平成26年から配布された文科省作成の『私たちの道徳』（中学校）では、平成20年版『要領』の第3の「視点」（自然、崇高なもの）に対応する部分の冒頭で、「今ここにいることの不思議」、生命に「いつか終わりがあること」、生命は「ずっとつながっていること」が、「生命を考える」の3本柱に据えられている。改定『解説』はこの流れを継承したものである。

まず生命の「連続性」から検討しよう。この点については、「生命はずっとつながっていることに関わりあっていること（連続性）」といわれる。『解説』は「関係性」という用語も使用しており、この点では「連続性」は「関係性」をも含むようにも思われるが、のちに見るように、両者は区別されている。

「生命の連続性」の内容は世代から世代への生命の継承である。中学校理科の『要領』の生物にかんする部分では、「生命の連続性」が、生物の「殖え方」（生殖）と「遺伝現象」と関係させられている。『私たちの道徳』ではつぎのような詩歌スタイルの文面がある。「私

の生命」は、「ずっと昔から受け継がれ」、「私が受け取ったもの。」「この生命」は「私のものだけど」、「私だけのものではない。」⁷⁾

つぎに、「生命の関係性」についてであるが、『解説』では「社会的関係性や自然界における他の生命との関係性」に言及されている。人間に特有の社会関係を別とすれば、「生命の関係性」は、生物界（生態系）において個体が他の個体と、さらに種が他の種と相互に依存していることを意味するであろう。「生命あるものは互いに支え合って生き」という『解説』の主張はこのことを念頭においているのであろうが、生態系への言及はなく、あいまいである⁸⁾。

5 生命の有限性と偶然性

新しい『解説』によれば、中学生の理解の順序から見れば、生命の有限性と連続性の理解が先行し、生命の偶然性の理解はこれらに続くとされる。人間の生命の「有限性」は、「生命にはいつか終りがあること、その消滅は不可避的で取り返しがつかないこと（有限性）」と説明される。ここでは、いつか死を迎えるという生命時間的な制約の面が指摘されるが、生命は空間的な制約も伴うであろう。まず、生命はいつか生まれ、いつか死ぬという点で、当事者の生命体の欲求や意志（人間のばあい）には依存しない。この制約も有限性の特徴の一つである。さらに、生命体は他の生命体と相互依存に、これによって制約され、さらに非生物的条件（無機的自然環境）によっても制約され点でも、有限である。生命の有限性のこの面は生命の関係性、連続性と密接に関連するが、『解説』ではこの点には言及されていない。

ところで、生命の「消滅は不可避的で取り返しがつかないこと」は有限性（少なくとも狭義の）には含まれないはずであるが、それが生命の「唯一無二の存在」と結合され、さらに生命の尊厳に接続される。また、とくに人間の生命は一回性をもち、＜かけがえがなく＞（代置不可能性）、＜取り返しがつかない＞（反復不可能）ものであり、この点でも尊厳をもつといえるであろうが、『解説』では人間の生命のこの固有の特徴への言及はない。

つぎに「生命の偶然性」にかんしてであるが、『解説』では、「今ここにいることの不思議（偶然性）」について語られる。「生命の不思議」の記述は平成20年版で付加され、『私たちの道徳』では、「今、自分がここにいることの偶然性」に言及された。改定『解説』では生命の偶然性がいっそう強調されるが、それが具体的に何を意味するかは不明である。

『私たちの道徳』では、「星の数ほどの偶然があって」、「私が、今ここにいることの不思議

議』について詩歌風の記述がある。ここでは、人生が無数の偶然の集積であり、その結果として、自分が今偶然に存在（実存）し、生きているかのように語られている。たしかに、すべての存在者は偶然にまとわれ、生命は複雑な仕方でも多くの偶然にさらされ、とくに人間の生命においてはこの点が顕著である。しかし、すべての存在者、すべての生命体、すべての人間は一定の必然性によっても制約される。『解説』においては生命の連続性と関係性に言及されているが、これは必然性の一種である。必然性は裸のものではなく、多くの偶然性をまとい、偶然性を媒介にして貫徹される。したがって、偶然性のみを強調することは一面的であり、非合理主義に傾斜しかねない。なお、人間の生命（人生）は多くの社会的、文化的要因によって左右され、複雑な偶然性と必然性を伴う。個人の存在（実存）と生命（生存）の偶然性は一方では、受動的性格のものであるが、他方では、個人が自然的、社会的・文化的要因によっては決定されつくされず、自由に自分の存在と生命に意味を与え、自分らしく生きるという積極的性格ももつであろう⁹⁾。

『解説』では「生命の不思議」にかんして、「生命体の組織や生命維持組織の仕組みの不思議」に言及されている。しかし、「生命体の組織や生命維持組織の仕組み」は「不思議」にとどめられるべきではなく、科学によるその解明の努力が求められるであろう。アリストテレスが、自然に対する驚異が学（哲学）の成立の動機となったと指摘したように、不思議という意識が科学研究の重要な動機づけとなる¹⁰⁾。しかし、生命についての科学と無関係に「生命組織の不思議」を固定させることは非合理主義や神秘主義に道を開くことになりかねない。

6 生物学的・身体的生命と社会的・文化的生命

改定された『解説』に特徴的なことの1つは、「社会的・文化的生命」が主張されていることである。つぎのようにいわれる。「生命は、連続性や有限性を有する生物学的・身体的生命に限ることではなく、その関係性や精神性における社会的・文化的生命として」「捉えている」〔——文章が整っていない〕。

たしかに、人間の生命は社会的・文化的側面をもち、生命倫理においてもこの側面が重要になる。平成20年版の『解説』では、「人間の生命は人間関係の中で保たれているという側面がある」といわれたが、ここでの人間の生命は基本的には生物学的、身体的なものであろう。生命の社会的・文化的側面と「社会的・文化的生命」とは異なる意味をもつ。しかし、『解説』では生命体（生物）一般の生命の記述から人間の生物学的・身体的生命の記述へ、さらに「社会的・文化的生命」へいつのまにか、なし崩し的に移行していく。人間の生命

の連続性、有限性、偶然性もこのような流れのなかで説明される。

日本語では「生」について、狭義の生命（いのち）、生活（暮らし）、人生（生きること）がいちおう区別される。いのちは生物的・身体的なものを基礎とするが、暮らしや、生きることにおいては社会的・文化的側面が重要である。道徳においては「生き方」が問われるが、生きることについては第1、また第2、第3の「視点」で基本方向が示されているのであり、それがあえて「生命」と呼ばれて、自然界における生命との関係で第4の「視点」で扱われる必要はないであろう。

個人の生命（生活）は生物的・身体的な面だけでなく、社会的・文化的な面でも他人の生命と関連している。例えば、自殺の問題にかんして、個人の生命がたんに「自分のもの」でなく、他人の生命と関連していることを考慮し、その意味を理解することが重要である。このように、個人の人生や生活は社会的・文化的側面をもつが、これを「社会的・文化的生命」として実体化することは不適切である。教育において考察の対象とされるのはまず、個人が人間らしく生きることであり、これを踏まえて個人と社会との関係、個人の生き方の社会的側面が問われる。ここでは生きる主体は個人である。これに対して、「社会的・文化的生命」と呼ばれるべきには、主体はたんに個人的ではなく、むしろ集团的であり、家族の生命、民族の生命、さらには人類の生命を意味することになる。

7 汎生命主義と形而上学——『期待される人間像』における宗教的傾向

ここで想起されるのは、昭和41年に出版された『期待される人間像』である。そこではつぎのようにいわれた。「われわれはみずから自分の生命をうんだのではない。われわれの生命の根源には父母の生命があり、民族の生命があり、人類の生命がある。ここにいう生命とは、もとより単に肉体的な生命だけをさすのではない。われわれには精神的な生命がある。」（第二部、第一章、「五 畏敬の念もつこと」）。ここでは、生命が精神的性格をもつと見なされたうえで、個人の生命の「根源」として、祖先（家族）の生命、民族の生命、人類の生命が挙げられ、個人の生命の根源に集团的生命がおかれている。

改定された『要領』と『解説』では、生命は「生物的・身体的生命」、「社会的・文化的生命」、さらに、「人間の力を超えた畏怖されるべき生命」をも意味するといわれる。第1の生命は、他の生物との共通の生命であり、第2の生命は人間に特有の生命である。それでは、第3の生命はどのようなものであろうか。これについての説明がないまま、第3の生命は、「人間の力を超えたもの」と結合される。ここでは、万物（人間、社会、生物および無生物を含め）の根底に生命（根源的生命）があるという世界観が背景にされている

と思われる。このような世界観は原始的にはアミニズム（万物を生命的原理の現象と見なす）として登場した。このような見方は哲学的には汎生命主義と呼ばれ、形而上学的な性格をもつ。

『期待される人間像』ではさらに「生命の根源」について語られ、それは「聖なる」ものであり、これに対する畏敬の念が「真の宗教的情操」であり、「人間の尊厳も愛も」、「真の幸福も」それに基づくとされる。「生命の根源」といわれるものは、哲学的に見れば、超越者であるが、これは宗教においては神仏となる。『期待される人間像』は神仏に直接に言及していないが、形而上学を超えて宗教へと進むといえる。『要領』と『解説』では、「生命の根源」や「宗教的情操」について語られてはいないが、「人間の力を超えたもの」は＜超越者＞を意味する。それは人間（社会）をだけではなく、自然をも超越したものであり、人間と社会の根底にあるものであろう。

注

- 1) 小学校の昭和33年版の『要領』では第16項目が、「やさしい心を持って、動植物を愛護する」とされ、第17項目は、「美しいものや崇高なものを尊び、清らかな心をもつ」とされていた。昭和43年版ではこれら同一のものがそれぞれ第14項目、第15項目とされ、昭和52年版では第10項目が、「自然を愛護し、優しい心で動物や植物に親しむ」とされ、第12項目は昭和43年版の第15と同一のものとなっていた。
- 2) 昭和44年版の中学校『要領』では、「生命を尊び、心身の健康を増進を図り」という第1項目の説明として、「自他の生命を尊重し、身体、精神の健康とともに、精神の健康を図ること」と述べられ、昭和52年版でもほぼ同様に、「生命を尊び、心身の健康を増進を図り」という第1項目の説明として、「自他の生命を尊重し、心身を鍛えて健康を増進を図り」と述べられていた。なお、昭和33年版の『要領』では、「日常生活の基本的な様式」にかんする第1項目の説明として、「生命を尊び安全の保持に努め、心身ともに健全な成長と発達を遂げるよう励もう」、「自己はもとより他のすべてのものの生命を尊ぶこと」という記述があった。
- 3) ピコ・デラ・ミランドラはルネサンス期に、自由意志を神によって与えられた人間が尊厳をもつと見なしており、人間の生命が尊厳をもつとは主張していない。
- 4) このような見解は「パーソン論」と呼ばれる。そのなかで、功利主義の影響下にある論者（P・シンガー）は、人格を利益の容器のようなものと見なし、人格の尊厳をも認めず、社会的利益の観点から、人格をもたない人間個体の生命を扱うことを主張する。
- 5) 平成1年版の『要領』に影響を与えたといわれる梅原猛氏はつぎのように述べている。日本古来のアミニズムに含まれた「生命の循環」や「生命の平等」の思想が仏教の受容のさいにこれと融合して、「山川草木悉皆成仏」という観念が生じた。原始仏教（さらにはその源流となるインドの宗教）と日本のアミニズム（神道にも影響した）とに共通の面があり、これによって両者の融合が生じたと解釈することも可能かもしれない。
- 6) 筆者は、すべての生命の平等という思想の深い意味を受け止めながらも、人間と他の生物の生命の実際の扱いのさいには相違が避けられない（相違ある平等）と考える。
- 7) 『私たちの道徳』で、「私は生命というたすきを受け取り」、「人生というコースを」「走りきらねばならぬ駅伝走者。」といわれ、「転んでも、立たなければならない」といわれるばあい、生命の継承が競争

への適応と結合されているように思われる。

- 8) 中学校理科の『要領』では、「自然のつりあい」に言及されており、これは「生態系の均衡」を意味する。
- 9) 実存主義は「実存」を人間に限定したうえで、その非合理性を強調する。サルトルによれば、人間はなんらの意味もなく、偶然にこの世におかれ、人生において運命に拘束されるが、生きる意味は外部から与えられるのではなく、自分で見出すものであり、人間は自由に自分を創造していく。必然性との緊張関係のなかで自由で個性的な生き方を求めることの解明は重要な課題である。
- 10) カーソンは環境倫理学の名著『沈黙の春』で「センス・オブ・ワンダー」について述べ、自然の「神秘さや不思議さ」に対する感性を重視したが、彼女は科学者としてこのセンスを科学研究と結合しようとした。

V 崇高性と「人間の力を超えたもの」

1 自然の美と崇高——美学と倫理学

第4の「視点」の第2項目は、「自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること」〔自然愛護〕というものである。平成10、20年版『要領』では、「自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」（平成1年版では、「自然を愛し」とされていたが、今回の改定によって後半部分が第3項目として独立させられた。平成1年版から平成20年版までの『要領』では、「自然と崇高なものにかんすること」が「視点」の1つとされてきたにもかかわらず、項目では「崇高なもの」に触れられていない。今回の改定によって第2項目に「崇高さ」という語句が含まれ、これが、つぎの項目における「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」に接続する役割を与えられることになった¹⁾。

『解説』では、自然の「美しさ」とともにその「神秘さ」に言及され、「人間の力が及ばない存在」として人間に「恐れ」や「緊張」をもたらすものが崇高なものに見なされている。美や崇高は本来は美的なものである²⁾、道徳教育において重点的に扱うべきテーマかどうかについて疑問が生じるかもしれない。思想史においては、美や崇高の感情は高度の洗練された情操として道徳的情操と関連つけられることがあるが、中学校の教科では通常は崇高は扱われないのに、なぜ突然、「道徳科」でこれが扱われるのかという疑問もありうる³⁾。

『要領』の本項目で、「自然を美の対象としてでなく、畏敬の対象として捉えさせること」、「有限な人間の力を超えたものを謙虚に受け止める心を育てること」が求められているが、「崇高の感情」を「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」へ接続するために、その性急な涵養に走ることは戒められなければならない。

2 人間の謙虚さと自然の愛護

『要領』の第2項目を見るかぎり、自然愛護の主要な理由は、自然の崇高性にあると受け取られるであろう。第3項目には、「美しいものや気高いものに感動する心」が含まれており、このことをも考慮すれば、美と崇高性をもつ自然を愛護することが主張されていると解釈されるであろう。

しかし、『解説』によれば、第1項目で確認された、人間の生命と他の生命との相互依存を——さらにより広くは人間が「自然の中で生かされている」こと⁴⁾——を根拠に、「人間が有限なものであるという自覚によって」、「とかく独善におちいりやすい人間の心を反省させ」、「自然に対して謙虚に向き合うこと」が求められている。

ただし、これらの主張と第1項目との接続関係は明確ではない。第1項目では人間の生命が人間以外の生命との関係で理解されたが、第2項目では人間と自然全体（無生物を含め）との関係が主題となっている。ここでは、自然との比較での「人間の有限性」が問題とされているが、この有限性は、第1項目でいわれた「人間の生命の有限性」（「いつか終わりがあること」）よりも広い。しかし、このように生命が広義に理解されることによって、第1項目で示された生命一般の尊厳、人間の生命の有限性が自然の崇高性と、人間の有限性へなし崩し的に移行し、さらに第3項目の「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」へと接続していく。

ここで、人間の生命が他の生物（生態系）によって支えられ、さらには自然を基盤とするという事実を基礎にして、そこから人間の生物や自然にたいする倫理的関わりをいかに考えるかが問題となる⁵⁾。しかし、このような事実の認識から生命や自然に対する道徳的な関わり（態度）が自動的に生じるわけではない。他の生命や自然に対する感謝や尊敬の念は、この事実を踏まえながら、人間が自分の生活を自己反省することによって生じる。環境倫理学においても、この問題が解消すれば、他の基本的諸問題の解決も容易になるが、このことは国際的にも、国内的に果たされていない。他の生命や自然への感謝についてはつぎのような批判がしばしば出される。それはすなわち、感謝（より基本的には義務や責任）は、人間の行為に対して、意志をもって応答することが可能な存在者（他の人間、神仏）に対して成立するのであり、このことが不可能な自然存在者に対しては無意味であり、このような存在者に対する感謝は擬人的なものにすぎないというものである。論拠を示して、このような批判者に反論しでなければ、自然に対する感謝は独断的なものにすぎなくなる。

3 自然との「心のつながり」は可能か

『解説』では、自然の愛護は、「自然の生命を感じ取り、自然との心のつながりを見い出して共に生きようとする自然への積極的な対し方」、「自然との心のつながりを見いだし同行する者として生きようとする自然への対し方」であるともいわれる。ここでは、「自然の生命」、「自然との心のつながり」について言及されているが、無生物を含む自然全体が対象になっているのか、生物界のみが対象になっているかが不明である。前者であれば、無生物にも生命や心を認めることになるが、これは比喩的なものであるか、万物が生命や心をもつと見なす独特の思想（アニミズム、形而上学）に基づくものであるかであろう。人間は、いわゆる高等動物とのあいだでなんらの「心のつながり」をもつことができる（野生動物とのあいだでは困難であろう）としても、それ以外の動物や植物とのあいだでこれをもつことはできないであろう。

環境教育（環境学習）においては人間の自然に対する感情的関わりも重要な役割を果たしており、人間と自然との情緒的一体性を感じるための運動も試みられている。しかし、そのような試みは自然科学的知見（理科教育）と両立するものでなければならず、安易なく超科学的な運動となってはならないであろう⁶⁾。

4 自然の崇高性から人生の崇高性へ

第4の「視点」の第3項目は、「美しいものや気高いものに感動する心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること」（[感動、畏敬の念]）とされている。ここでの気高いものは崇高なものを意味する。小学校の段階では、「自然のすばらしさや偉大さ」について学ぶが、中学校においては、自然の崇高さとそれに対する畏敬の念についても学ぶとされる⁷⁾。

ここでは、まず美しいものや気高い（崇高な）ものがキーワードとされ、これらが「人間の力を超えたもの」と結合される。平成10、20年版『要領』では、「自然を愛護し、美しいものに感動する心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」とされていた。（平成1年版では、「自然を愛護し」が「自然を愛し」となっていた。）⁸⁾改定『要領』では、「自然を愛護し」が独立に第2の項目とされ、後半部分において、「感動の心」が「美しいもの」のほかに「気高いもの」に対するものとされた。

自然の崇高性については、阪神淡路大震災、東日本大震災などの災害において示された自然の猛威（すさまじさ）が例に出され、自然との対比で人間の有限性が指摘され、「人

間の力を超えたものを謙虚に受け止め」、これを「畏敬の対象」とすることが強調される。たしかに、大震災は自然における人間の位置、自然に対する人間の態度にかんして根本的な反省を求めるものであったが⁹⁾、日本社会（政治的、経済的指導者を含め）がこれらについてどこまで深い反省を行ない、かつそれに基づく具体的行動をどこまで行なっているかは疑問である。このような社会的事実の外部で自然にかんする人間の抽象的、観念的な反省を主張しても、生徒にとってはリアリティと説得力に乏しいであろう。

第2項目では、自然の美と崇高について語られていたので、これとの接続では、美と崇高をもつ自然が「人間の力を超えたもの」を意味すると見なされているようにも思われる。しかし、『解説』における説明は必ずしもそうではなく、錯綜している。そこでは、突然、自然の崇高から人生の崇高へ移行する。自然の美しさについてだけではなく、人為的なものとしての芸術作品の美しさ、「人の生き方」の美しさや気高さについて語られる¹⁰⁾。「崇高な生き方」は、「品格ある生き方」であり、「畏敬を感じさせるような生き方」であるといわれる。ここでは崇高性が人間へ内面化される。もともと美的なものである崇高が人間の道徳的特徴にも拡大されることによって、崇高な生き方が道徳的に求められることになる¹¹⁾。しかし、崇高な生き方とはなにか、その基準はなにかについては示されていない。それでは、人間の生き方の崇高性は「人間の力を超えたもの」とどのように関係するのだろうか。「人間の力を超えたもの」も人間へ内面化されるのであろうか。

5 崇高性から超越性へ

「人間の力を超えたもの」は『要領』のなかでも最も理解しにくく、扱いにくいものである。「人間の力を超えたもの」という用語は昭和44年版の『要領』にはじめて登場する。そこでは、第8項目が、「人間の人間らしさをいとおしみ、美しいものや崇高なものにすなおにこたえる豊かな心を養う」とされ、その説明として、「自然を愛し、美しいものにあこがれ、人間の力を超えたものを感じとることができる心情を養うこと」が示されていた¹²⁾。これは『期待される人間像』（昭和41年）の影響によると思われる。

「人間の力を超えたもの」は自然を意味するのであろうか。新しい『要領』の第2項目についての説明では、自然の力の威力（すざましき）との関係で、「人間の力を超えた自然の崇高」について語られたが、第3項目についての説明でもつぎのようにいわれる。「人間はさまざまな意味で有限なものであり、自然の中で生かされていることを自覚することができる。この自覚とともに人間の力を超えたものを素直に感じ取る心が深まり、これに対する畏敬の念が芽生えてくるであろう。」¹³⁾

しかし、「人間の力を超えたもの」が自然を意味するとすれば、「人間の力を超えた自然」と表現すればよく、「人間の力を超えたもの」という抽象的表現を繰り返す必要はないであろう。人間の力を超えたものは、人間をも自然をも超える＜超越者＞を意味すると見なされているのではないだろうか。このことは第4項目とも関連する。

6 「よりよく生きる喜び」と崇高性、超越性

第4項目は、「人間には自らの弱さと醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと」(「よりよく生きる喜び」)とされる。多くの人にとって疑問となるのは、この項目が、「生命や自然、崇高なもの」にかんする第3の「視点」になぜ属すのかである。この項目はむしろ、「自分自身に関すること」という第1の「視点」に属すと考えるのが自然なように思われる。じっさい、第1の「視点」の第5項目では、「希望と勇気をもち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること」と述べられている。第4「視点」の4項目では、これが詳細にされ、「弱さと醜さを克服する強さや気高く生きようと心」をもつことが求められているのであろうか¹⁴⁾。

しかし、たんにそうなのではなく、人間の生き方の崇高性が、「人間の力を超えたもの」、超越者と関連づけられていると思われる。人間は有限である(「弱さや醜さ」をもつ)が、このようなあり方を乗り越え(超越し)ていく点で、崇高性(気高さ)と＜超越性＞をもつと見なされているようである。ここでは、有限なものをつうじた無限なものへの志向、たえざる＜超越化＞という擬似弁証法的な理解が念頭におかれているのであろうが、これは、一般の市民には難解な哲学的解釈と受け取られるであろう。

すでに第3項目で、「美しいものや気高いもの」が人間自身の生き方にも求められていたが、第4項目では、崇高なものが人間に内面化されるだけでなく、＜超越者＞(「人間の力を超えたもの」)が、人間の生き方における＜自己超越化＞に内面化されると見なされていると解釈することもできるであろう。このような＜自己超越＞は＜超越者＞、さらには神仏をめざことへ接続していく可能性もある。

今回改定された『要領』で、第3の「視点」と第4の「視点」との順序が入れ替えられた理由についてはすでに述べたが(Ⅱ-2)、それに付け加えてつぎのことを指摘しておきたい。＜自己超越＞として「よりよく生きる」という喜びにかんする項目は、道徳の「視点」全体を総括する位置におかれることになったといえる。それは、第1の「視点」の「自分自身に関すること」、第2の「視点」としての「人との関わりに関すること」、第3の「視点」の「集団や社会との関わりに関すること」を、第4の「視点」「生命や自然、崇高な

ものに関わることに接合する。このようにして、人間は他人や集団社会に関わり、自然に関わり、＜超越者＞に関わることをつうじて、自分自身に関わりと説明されることになるのであろう。

注

- 1) 昭和44年版の『要領』では、「美しいものや崇高なものにすなおに答える『豊かな』心を養う」という項目（第8項目）が示され、昭和52年版の『要領』では、「自然を愛し、美しいものに感動し、崇高なものに素直に答える豊かな心をもつ」という項目（第9項目）が示されていた。
- 2) 道徳感情学派の創始者のシャフツベリは美的感情と道徳的感情と密着したものと捉え、さらにこれを宗教とも結合した。カントは美的感情と道徳的感情とを区別しながら、前者が後者を準備すると理解した。近代において崇高の独自の意味をあらためて明らかにした先駆者はバークである（『われわれの美と崇高の観念の起源』）。彼の説明によれば、「大いなるもの」、「威力をもつもの」は人間に快楽をではなく、苦痛を与えるが、人間を刺激して、より高い快楽と感情へと高める。このように自然の崇高も人間の側から捉えられるのであり、ここに近代性が見られる。カントはバークの見解を道徳的立場から捉え直す。人間の構想力が及ばないものが崇高なものであるが、根本的には崇高性は、感性的な制約を克服して、道徳性（実践理性）へ高まる努力を行なう人間にあり、自然の崇高性は人間自身のこの内的な崇高性を外部に投影したものである。『解説』における崇高についての説明とカントのこのような見解とのあいだに一種の類似性を見出す論者もあるかもしれない。しかし、自然の崇高性を人間の道徳的努力の崇高性に呼応させ、自然の崇高性を人間の内部へ転換するカントの論理には説得力が乏しい、と哲学界では一般的に見なされている。
- 3) 昭和33年版の『要領』では、自然への関わりは道徳的情操の涵養の一環に位置づけられていた。「情操を豊かに」という項目（2-（9））にかんして、「自然に親しみ、動植物を愛護し」という記述があった。新しい小学校『要領』では、「自然のすばらしさや不思議さ」（中学年）、「自然の偉大さ」（高学年）が自然愛護の項目のなかに含められている。
- 4) 「自然の中で生かされている」ことは、「生命あるものは互いに支え合って生き、生かされている」ことよりも広い。生命体（その体系）だけでなく、自然全体が人間の生命（生活を含む？）の基盤であることが主張されているように見えるが、このことについての説明はない。
- 5) 筆者は、勤務学校および他大学で環境倫理の講義を行なったさいに、総合的自然科学（広義の地球科学）、自然観についての説明から開始した。理科の『要領』では、「自然を総合的に見ること」、「自然の恵みと災害」に言及されている。人間の与える自然の影響の総合的な認識のためには、自然科学的教育のほかに、人文・社会科学的教育も必要であらう。
- 6) 自然中心主義的な自然保護運動においては、自然との情緒の一体性を感じ取ることが強調されるばかりがあるが、これに対しては、アニミズムへの逆行という批判が強い。筆者は人間と自然とのあいだのコミュニケーションの可能性に関心をもっているが、それは擬似的コミュニケーションという性格をまぬがれない。それは、人間の自然的存在者への作用に対するこの存在者の反応を人間が受け止めるという過程を含むが、厳密に双方向的なものではなく、一方的なものであって、人間のがわからの思い入れ（擬人的なもの）となる可能性を含む（拙論「自然への義務と自然とのコミュニケーション」尾関周二『エコフィロソフィーの現在』大月書店、2001年）。
- 7) 小学校『要領』においては、低学年段階では、「美しいもの、気高いものに感動する心」は「すがすがしい心」と呼ばれている。崇高なものや「人間の力を超えたもの」は小学校低学年の段階は受け止めが困難であると思われたためであらうが、このことは小学校の中・高学年、中学校においても（程度の差はあるとしても）共通であらう。小・中学校の芸術教育においては崇高なものや「人間の力を

超えたもの」は必ずしも扱われないであろう。また、「すがすがしい心」と「崇高なものについての感情」とのあいだにはかなりのズレがある。「すがすがしさ（清々しさ）」は日常的用法では、＜さわやかで心地がよい状態＞を意味する（そのほかに、＜思い切りのよいあり方＞、＜物事順調に進むあり方＞も意味する）。そこには通常、崇高なものや、「人間の力を超えたもの」についての感情は含まれない。なお、中学校の今回の『解説』では、「心の奥深さや清らかさを描いた文学作品等の気高いもの」に言及され、心の「清らかさ」が「崇高性」と密接に関連させられているが、ここでは「清らかさ」に独特の意味が込められているのかもしれない。

- 8) 「崇高なもの」についての記述は昭和44年版『要領』に登場した。そこでは第8項目として、「人間の人間らしさをいとおしみ、美しいものや崇高なものにすなおにこたえる豊かな心を養う」とされ、その説明として、「(2) 自然を愛し、美しいものにあこがれ、人間の力を超えたものを感じとることのできる心情を養うこと」が加えられていた。また、昭和53年の『要領』でも、「自然とののかかわり合いについて考え、自然を愛し、美しいものに感動し、崇高なものに率直に答える豊かな心をもつ」（第9項目）とされ、その説明として、「自然や美しいものを愛する心をもつとともに、人間が有限なものであるという自覚に立って、人間の力を超えたものに対して畏敬の念をもつように努める」という記述があった。平成1年版ではこの内容が継承され、自然とののかかわり合いという第3の「視点」に格上げされたうえで、「自然を愛し、美しいものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」がその第1項目にされたといえる。なお、昭和33年版には、自然との関係にかんする独立の記述はなく、2の(9)の「情操を豊かにし、文化の継承と創造に励もう」という項目の一部に、「自然に親しみ、動植物を愛護し」という記述があるにとどまる。
- 9) 筆者はこの問題について哲学的、文明論的観点から考察したことがある。岩佐茂・高田純『脱原発と工業文明の岐路』、大月書店、2012年。
- 10) 平成1年版『要領』では「芸術作品としての美、人間の行為の美しさ心の美しさ」に言及され、平成10、20年版『要領』では「芸術作品などの美しいもの」、「人間の行為の美しさ」に言及されている。
- 11) このような見解はカントの『判断力批判』における見解と類似性をもつと解釈できるのかもしれない。カントは崇高性を自然のもののなかにではなく、人間が道徳的生き方を目指して、自分を乗り越えていくことのなかに見出す。
- 12) 昭和52年版の『要領』でも第9項目としてつぎのようにいわれる。「自然を愛し、美しいものに感動し、崇高なものにこたえる豊かな心をもつ。(自然と人間とののかかわり合いについて考え、自然や美しいものを愛する心をもつとともに、人間が有限なものであるという自覚に立って、人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつように努める。)」
- 13) 昭和52年版『解説』でもつぎのようにいわれていた。「自然やそのほかのものとのかかわりを考えていくと、人間は有限なものであるということを認めないわけにはいかない。このことを通して、人間の力を超えたものを感じ取る心が深まってくる。ここに、畏敬の念が芽生えてくるであろう。」
- 14) 昭和44年版『要領』ではすでに第8項目の説明として、「(1) 人間が、その一面にもつ弱さや醜さとともに、他面に示す強さやけだかさへの共感と自覚を通して、人間を愛する精神を深めていくこと」が、「(2) 自然を愛し、美しいものにあこがれ、人間の力を超えたものを感じとることのできる心情を養うこと」と関連させられていた。昭和52年版『要領』では、「人間として生きることの喜びを見だし、温かい人間愛の精神を深めていく」という第8項目の説明として、「人間のもつ弱さや気高さを信頼し」、「人間は一面において弱さや醜さをもつことを率直に認め」といわれ、それ続けて、「自然を愛し、美しいものに感動し、崇高なものに素直にこたえる豊かな心をもつ」が第9項目とされていた。

Ⅵ 崇高なもの、「人間の力を超えたもの」にかんする教材

1 『私たちの道徳』と道徳教科書

本稿では、改訂された『要領』の第4の「視点」（生命、崇高性、人間の力を超えたものにかんする「視点」）についての『解説』における断片的な説明を整理し、哲学的、倫理的な立場からその文脈を浮かび上がらせ、その問題点を指摘しようと試みた。これに対しては、一方では、筆者の読解は『解説』の趣旨を逸脱した的外れものであるという批判が、他方では、『解説』には明確なストーリーも理論的根拠も欠如しているのであるから、筆者の理解は一方的な深読みすぎないという批判が出されるかもしれない。しかし、少なくとも、『解説』にはこのような読解の余地があることは否定されえないであろう。

第4の「視点」については、他の「視点」と比較しても、その説明がとくに錯綜し、曖昧さを多く含む。『解説』に従って学校現場で教育が実施されるばあいには、混乱や戸惑いが生じるであろう。過去に『要領』に従って実践を試みた教員のあいだにも困惑が生じていたが、改定『要領』の『解説』はいっそう錯綜しているので、このことがいっそう深刻になると懸念される。

今回の『要領』では、子どもが生き方について「深く、多面的に考える」ことが、繰り返し強調されているが、そのためにどのような教材や資料が適切であるかが重要な問題となる。「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」となることに伴い、検定「教科書」の使用が義務づけられ、現在、「教科書」の編集が準備中である。一般に教科書は「主たる教材」であり、そのほかにも適切な教材（副読本、各種資料）の使用が認められている。今日、＜教科書を教える＞のではなく、＜教科書で教える＞、さらには＜教科書でも考えさせる＞ことが求められている。とくに道徳教育においては主要な目的は、他の教科におけるように、知識や技能の伝達をつうじて子どもの能力を発展させることではなく、子どもが生き方について深く、多面的に考えることを支援することであって、教科書はそのための手段であるから、その役割はいっそう限定される。通常の教科書は、教育内容の配列（科学と文化の体系と子どもの発達に応じた配列）を具体化したものであるが、道徳教育においては教科書と呼ばれても、それは、主要なテーマにかんして子どもが考え、調べ、討論するための資料のまとまりであらざるをえない。この点ではこれまでの副読本と「教科書」のあいだに根本的相違はないが、後者が主たる教材として使用を義務づけられる点では相違がある。

道徳教育において、「教科書」が示す資料がテーマに適合したもの、子どもの発達段階

や興味・関心に応じたものとなることは容易ではない。かりにそのような内容の資料が示されたとしても、それはあくまで1つの資料にすぎず、そのほかにも多くの適切な資料があるであろう。1つの資料（あるいは資料群）によっては、「深く、多面的に考える」とことは困難である。この点でとくに道德教育においては、学校や教師による多様な資料の工夫が重要な意味をもつのであり、それが推奨されなければならない。「教科書」にもっぱら頼ることは、生き方について深く、多面的に考えさせるという基本趣旨に背反する。

これまで、学校では、教科書会社などが作成した副読本、文部省が作成した資料集、地域、学校、教員が開発した資料などが、必要に応じて、利用されてきた。しかし、児童・生徒に対する各種アンケートによっても、教材や資料の魅力が乏しいことが道德教育に多くの不満や疑義を抱かせる主因の1つであることが明らかにされている。「魅力的な教材の開発」は臨時教育審議会（1987年、最終答申）で強調され、そのあとも「心に響く教材」の開発が課題とされてきたが、この点で顕著な前進はなかったといえる。

そのようななかで文科省は平成14年から『心のノート』を小・中学校に配布し、平成26年からは、これに替えて、『私たちの道德』（小学校低・中学年では『わたしたちの道德』）を配布した。後者は、従来の副読本と並行した使用が推奨されるもので、特異な位置づけをされている¹⁾。『心のノート』は短いフレーズやビジュアルな映像を散りばめ、これへの感想を子どもに記入させるものであったが、『私たちの道德』はこのような手法を部分的に継承しつつ、読み物や各種の簡単な資料をも含めており、文科省作成の『指導資料』（『私たちの道德 中学校 活用のための指導資料』）では、『私たちの道德』の特徴はつぎのようなものとされる。「読み物部分」（広義）は「読み物資料頁」（狭義）と「読み物等の頁」（「内容項目に関わるメッセージやコラム、写真やイラスト」を掲載した頁）を含むが、前者については、「重点化に係る内容項目を中心に九編を掲載した」（内容項目は合計24ある）²⁾。『私たちの道德』は、検定「教科書」の方法を示すという性格をもっていると思われる。「教科書」では、これまでの副読本の経験に基づき、「内容項目」に従った資料がより詳しく、網羅的な可能性がある。しかし、「道德科」における教育が「教科書」に依拠するばあいには、それが子どもたちに魅力的でないと受け取られるならば、この教育そのものに疑いや不信が生じることにもなるであろう。

2 生命、崇高性の扱い

以下では、とくに扱いにくいと見なされてきた、崇高性、「人間の力を超えたもの」にかんする「視点」について『私たちの道德』がどのような資料を提供しているか、それは

適切で効果的なものかどうかについて検討したい。

『私たちの道徳』では、「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」の「視点」に対応する箇所は、「生命を輝かせて」となっている。そこでは、第1項目「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」は、「かけがえのない自他の生命を尊重して」という見出しとされている。生命は人間の生命、しかもその生物的・身体的生命（いのち）に限定され、人間以外の生命への言及はなく、『解説』における説明よりは狭い内容になっている。このことは、生命を人間以外に拡大させ、それとの関係で人間の生命を理解することは、この部分では困難であると判断されたためであろう。ここでも、『解説』の内容と、学校におけるその具体化とのあいだのギャップが示されているといえる。

具体的な資料としては、人間の生命についてエッセー風の文章、出生・死亡の統計、有名人の言葉、コラム等の他に、読み物資料として、「キミばあちゃんの椿」（実質5頁弱）が掲載されている。しかし、これらの教材によって、自他の生命について生徒が深く多面的に考えることができるかどうかは確かではない。各種の副読本ではより多様な、読み物資料、および他の資料が示されているが、これらもあくまで資料の一部にすぎない³⁾。

3 「人間の力を超えたもの」の扱い

『私たちの道徳』では、「自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」という第2項目に対応する部分は、「美しいものへの感動と畏敬の念を」とされている。そこでは、自然と田園風景の写真、『解説』の内容を平易な表現としたアフォリズム風の文章、誕生と死亡の統計値、ワーズワースの詩⁴⁾、地震学者のメッセージ等が資料として掲載されている。読み物資料は欠けているが、この項目は「重点化」の対象でないという理由によるようである。

筆者は、崇高なものや「人間の力を超えたもの」の扱いに強い関心をもって、『私たちの道徳』に注目した。「人間の力を超えたもの」については、自然は、「人間の力で抗うことができない猛威を振るうことがある」というアフォリズムの一節が示されるにとどまる。「自然の神秘を感じる」という部分も同様である。「自然の不思議さ」についての感想を記入する欄があるが、これは一種の誘導尋問な方向づけである。また、これについて生徒がまちまちに「感じたこと」をどのように多角的に検討し、深めるのかが不明である。

「人間の力を超えたもの」に直接に関係する資料は示されていない。これは、当該の項目が「重点化」の対象ではない事情によるようである。また、自然の愛護に直接に関係する資料もなく、豊岡市（兵庫県）のコウノトリ野生復帰のプロジェクトが「自然との調和」

の例として簡単に紹介されているにすぎない⁵⁾。

これらのことはけっきょく、「人間の力を超えたもの」について適切な資料を示すことができなかったことを示している。これらのことは紙幅の制限という外面的事情によるだけでなく、このようなテーマを中学校の段階で扱うことが適切かどうかを疑わせるものになっているといわざるをえない。

4 人間の＜自己超越化＞の扱い

『私たちの道徳』では、「人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることに喜びを見いだすように努める」という第3項目に対応する部分は、「人間の強さや気高さ信じ生きる」とされている。そこでは、『解説』の柔らかな表現での要約、中学生の短い作文、杉原千畝（日本のシンドラー）の紹介、有名人の言葉、アンネ・フランクの紹介、さらに「二人の弟子」という読み物が含まれている。そこで話題にされているのは、一般に、困難を克服して努力することにすぎない。このような話題は、第1の「視点」のなかの、「自己を見つめ自己の向上を図る」という第1項目として扱われるものであり、あえて第2「視点」として扱う必要はないであろう。『解説』では、人間の生き方における強さ、気高と弱さ・醜さとのダイナミズム、有限性を乗り越える＜自己超越＞という擬似弁証法的説明が見られたが、『私たちの道徳』では、これらに直接に関係する資料は示されていない。

これらのことはけっきょく、第3の「視点」のその他の項目についても同様であるが、『解説』の内容が曖昧で、錯綜しているため、『私たちの道徳』の編集者もこれをくもて余している＜こと、さらに、この内容自身が教育上で不適切であることを示してはいないであろうか。

注

- 1) 『指導資料』によれば、「道徳の時間はもちろん、学校の教育活動全体を通じて、また家庭や地域においても活用することが期待される」といわれる。「教科者」が使用されるようになったあとも、『私たちの道徳』は不要にはならないと述べる論者もいる。
- 2) 『指導資料』では読み物資料についての指導案の例も示されている。今後「教科書」への依存によって指導案のマニュアル化が進行するおそれがある。
- 3) 「科学技術の発達と生命倫理」について1頁が当てられ、脳死と臓器医療、クローン技術、遺伝子検査、代理母、出生前診断に簡単に言及されているが、まず、このような医療技術や生殖技術の発展段階について中学生が学校教育においてどれだけの基本知見を獲得できるであろうか。さらに、これらの問題を人間の生き方に関わるものとして道徳的に考えることはより高次の課題である。「道徳科」の制約された時間の内部でこれを達成することは容易でない。

- 4) ちなみに、ワースの詩における <natual piety> は「自然への敬虔な態度」であり、これを「自然に対する畏敬の念」と訳すことは牽強附会に属すであろう。
- 5) 筆者は大学における環境倫理の講義で、人間と自然との調和の興味深い試みとして豊岡市におけるこのプロジェクトを紹介しているが、そのために、生態系（人工的生態系を含め）のあり方、産業と自然保護との関係、伝統的農業の意味、豊岡市民の社会的運動などについて自然科学的、社会文化的に考察しながら、倫理的課題を示そうとした。中学校段階で、限られた時間のなかで、このプロジェクトについて生徒が深く、多面的に考えることは容易でないであろう。